そしてこの画像のように、コンビニで売っているような枠のあるおでんではなく、多職種がごちゃまぜになって、いい出汁の出る家庭のおでんのように連携が取れたらいいなと考えています。

演題 128

診療所の立場から考える紹介状の役割とは？

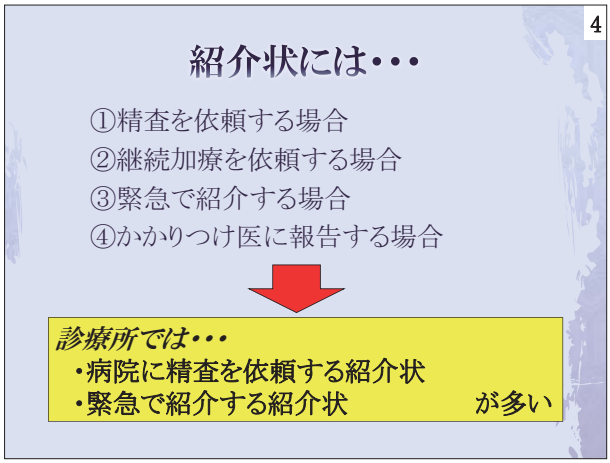
発表者 **鈴木 忠広**（岡山県：哲西町診療所）

共同研究者 佐藤 勝、村瀬 奈美、河村 智子、高尾 順圭、桑原 ひとみ、太田 雅恵、安陪 こず恵、高瀬 佳子

新見市哲西町は人口2,800人、高齢化率40％の町です。

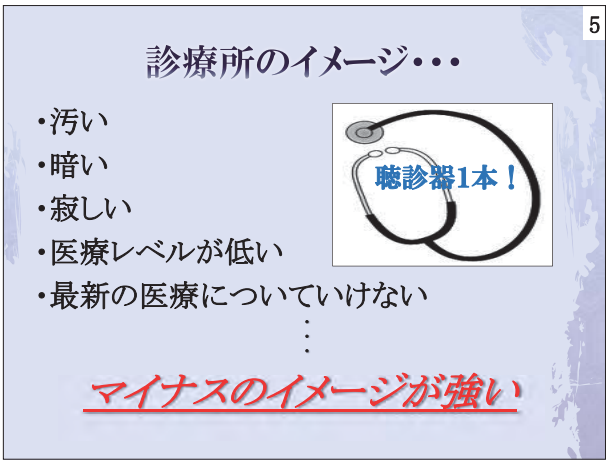
きらめき広場・哲西は、診療所も備えた複合施設であり、各機関がひとつ屋根の下に集まり連携をとる事で、地域包括ケアを推進しています。

診療所は無床ながら、町内唯一の医療機関として、あらゆる科の一次医療を24時間体制で行い、病診連携にも努め、保健・福祉などと連携し住民の健全な生活を支えるよう努力しています。

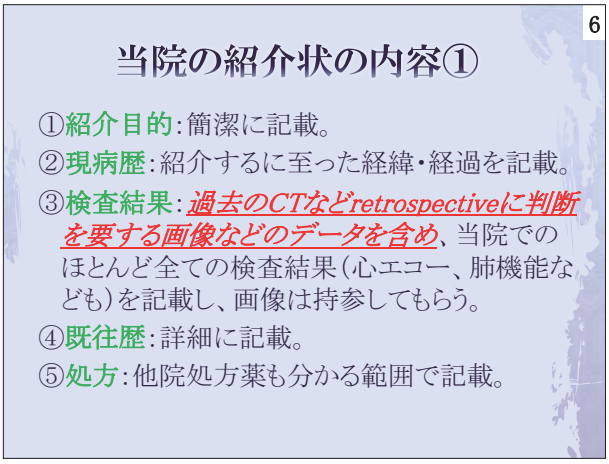


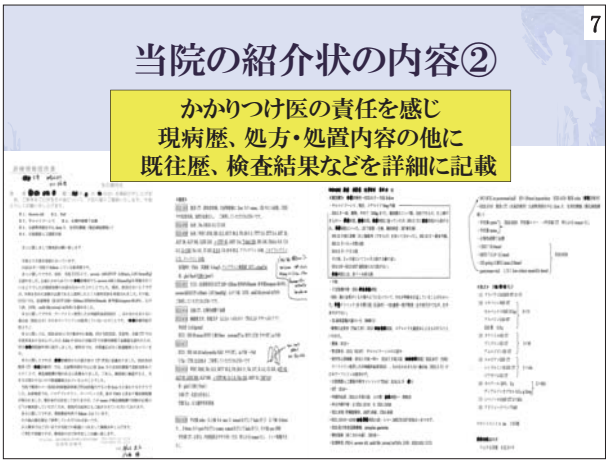
紹介状には、精査を依頼する場合、継続加療を依頼する場合、緊急で紹介する場合、検査結果などをかかりつけ医に報告する紹介など多種類あります。当院では月30～40通の紹介状を記載していますが、その中では、病院に精査を依頼する紹介状、緊急で入院加療をお願いする場合

の紹介状が多いです。



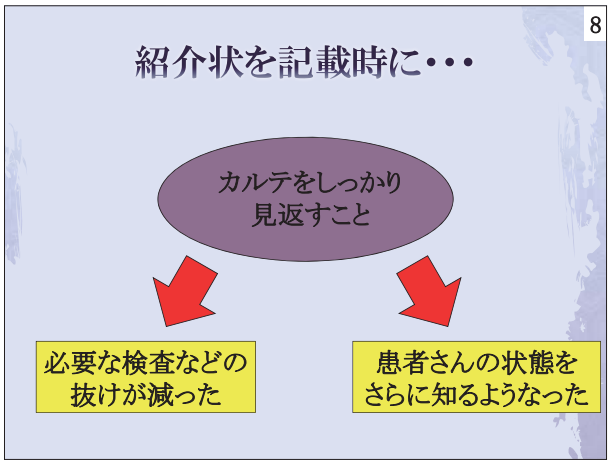
一般的に診療所のイメージは、医療レベルが低いなどのマイナスのイメージが強いと思います。



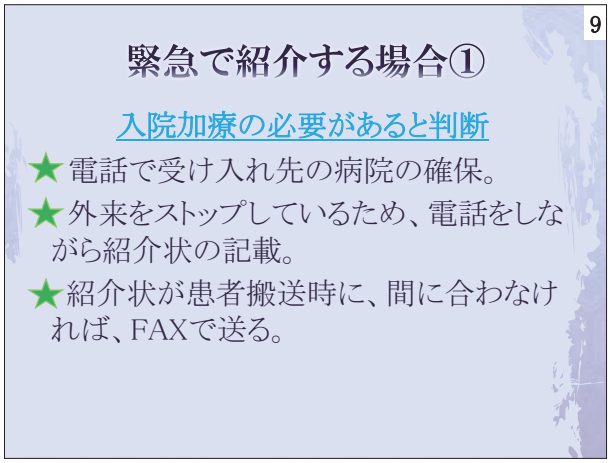


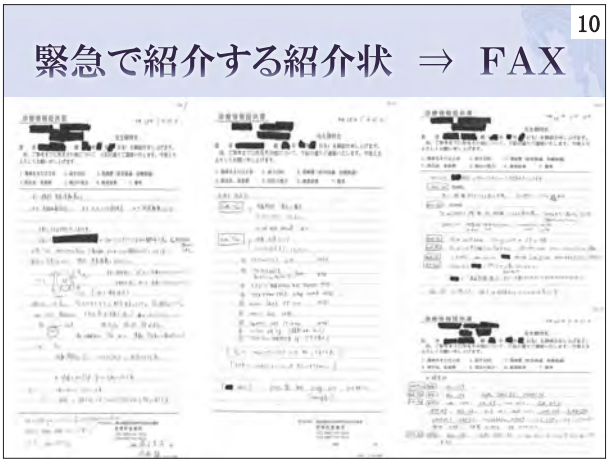
自分が病院勤務時に、情報量の少ない紹介状を頂いても参考にならず、診療に時間がかかった経験がありました。自身の経験や診療所に対するマイナスのイメージを払拭するために、時間と手間はかかりますが、現病歴はもちろんのこと、処方は分かる範囲で他院の処方まで記載し、既往歴、検査結果においても詳細に記載しています。かかりつけ医の責任感を自覚し、患者さんが何もしゃべらなくても紹介状を見れば分かってもらえるように、紹介先の病院に失礼がないように心がけて記載しています。検査結果に関しては、紹介目的の疾患のデータはもちろんのこと、紹介先の病院での診断の助けになればとの考えから、当院で行った最近の検査結果をなるべく全て記載するようにしています。

また、過去のCTなどretrospectiveみると、当時は気付かなかった所見に関しては、「当時は見つけられませんでした。」と正直に紹介状に記載し、画像などを持参してもらっています。

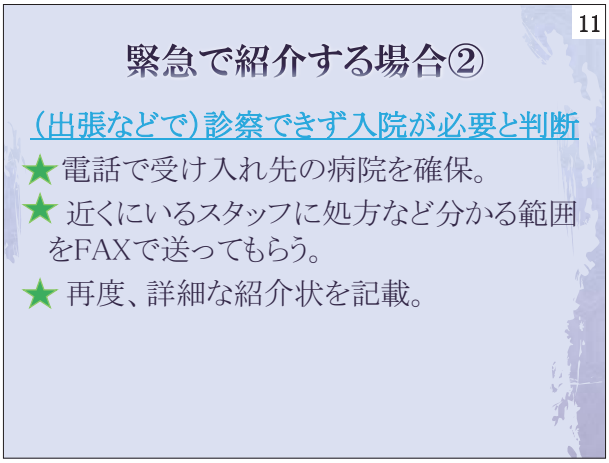


紹介状を詳細に記載するためには、カルテをしっかり見返すことが必要となります。その結果、検査の抜けが減り、既往歴などの見直しにより、患者さんの状態をよりよく知るようになりました。そして、まとめ挙げた既往歴はサマリーとして診療に活用しています。

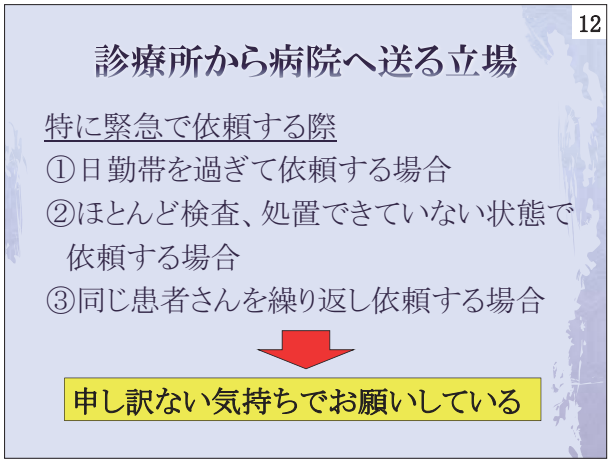




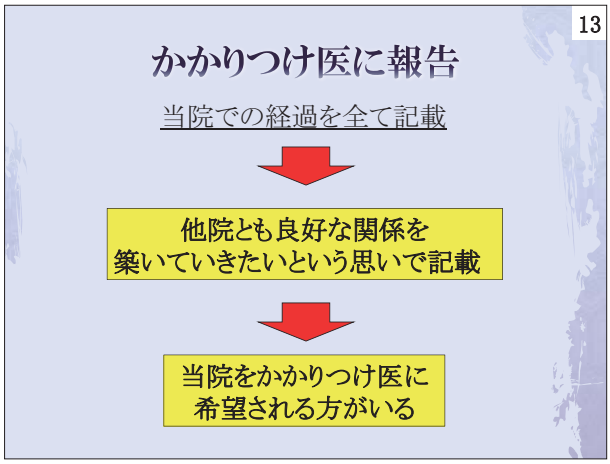
緊急で紹介する場合では、入院の必要があると判断した時は、まず電話で受け入れ先の病院を確保し、外来をストップしているため、少しでも早く外来診療に戻れるように、電話をしながら紹介状の記載をしています。患者搬送までに紹介状記載が間に合わなければFAXで紹介状を送るようにしています。

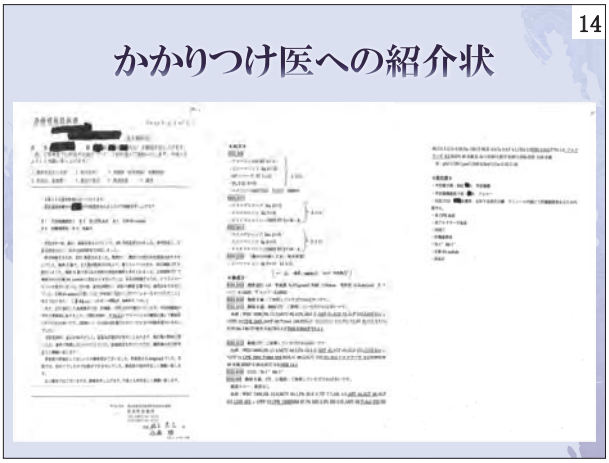


出張などで直接診察ができず入院が必要と判断した場合は、電話で受け入れ先の病院を確保し、近くにいるスタッフに処方など分かる範囲で紹介状を記載、FAXしてもらい、出張から帰ってから再度、紹介状を記載しています。

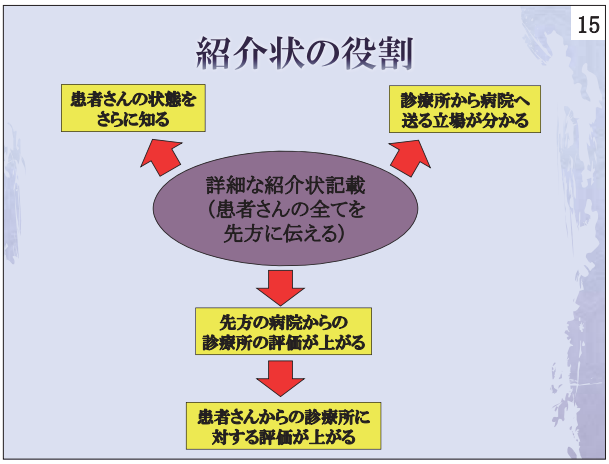


自分が病院勤務時は、患者さんを受け入れる立場でした。「なぜこの時間帯に送ってくるのか、なぜ同じ患者さんを繰り返し送ってくるのか、なぜ検査もせず送ってくるのか。」と思っていましたが、診療所に勤務し、夕方往診で呼ばれてしまうと日勤帯を過ぎての患者さんの搬送になってしまう事、往診先では何も検査できないことが多い事、特養入所中の高齢者は肺炎や尿路感染を繰り返すことが多い事などが分かり、申し訳ない気持ちで入院加療をお願いしていることが分かりました。

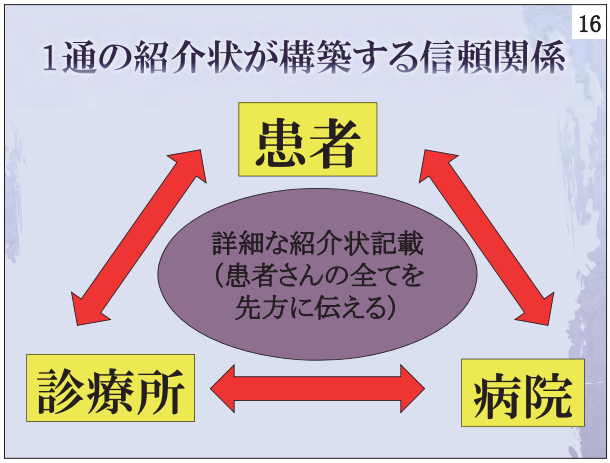




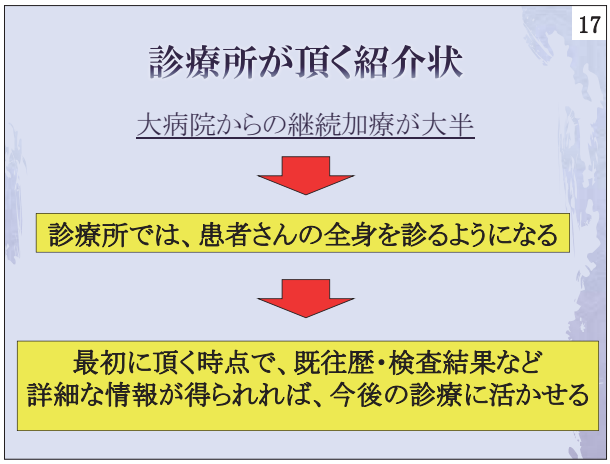
また、かかりつけ医が他院で、当院を受診された患者さんに対しても、他院とも良好な関係を築いていきたいとの思いから、かかりつけ医に当院での検査結果を含め紹介状を記載し報告しています。全身を診察し、必要な検査をして紹介状を１通書いただけですが、丁寧に診てくれるとのことで、当院に変わりたいと希望される患者さんもおられます。



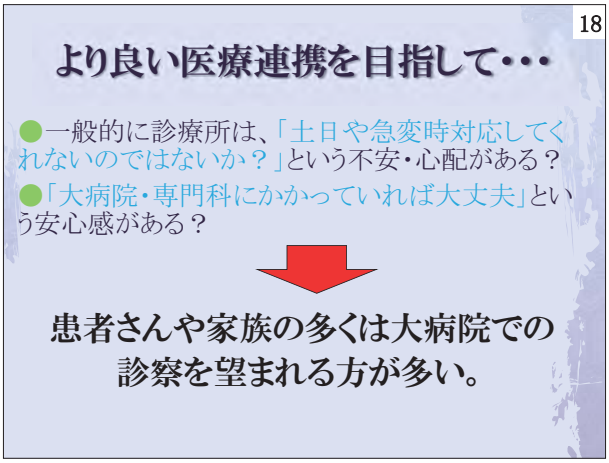
時間と手間はかかりますが、紹介状を詳細に記載することで、患者さんの状態をさらに知るようになり診療の助けになっています。一般的に、大病院からは、診療所は診療レベルが低いとみられているのが実情だと感じています。しかし、当院での診療内容及び診断した根拠、当院の思いを知っていただくために詳細な紹介状を記載することで、先方の病院からの当院に対する評価が上がっているのと同時に、患者さんからの診療所に対する評価も上がっていると感じています。



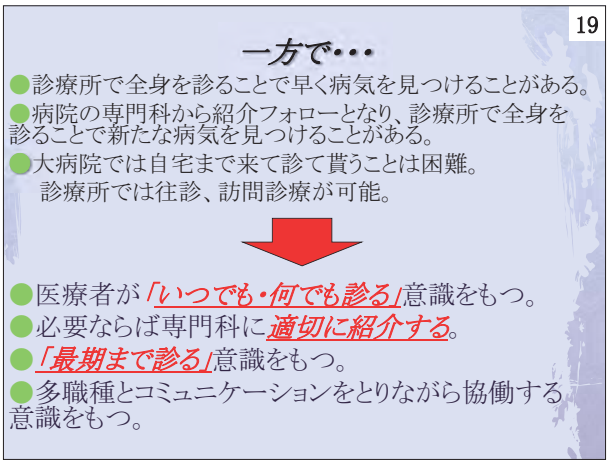
たった１通の紹介状でも、単に患者さんの情報提供だけでなく、患者さんの全てを先方に伝える詳細な紹介状を記載することで、診療所と病院との信頼関係を構築するのと同時に、診療所と患者さんとの信頼関係をも構築する手段に成り得ることを実感しています。

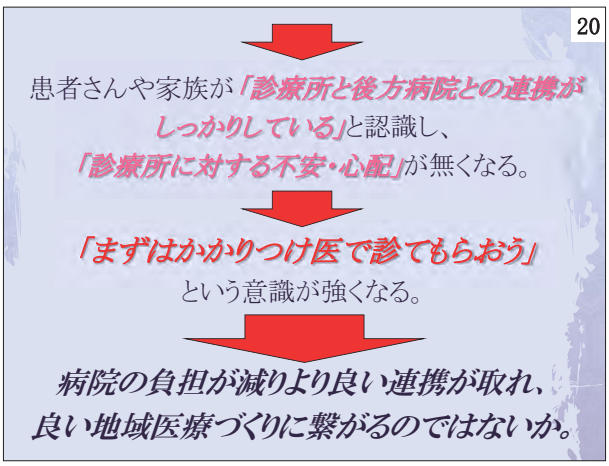


逆に、診療所が頂く紹介状は大病院からの継続加療が大半を占めています。大病院では、専門科別に診ていただいていますが、診療所では患者さんの全身を診るようになります。頂く紹介状に、既往歴や検査結果など詳細な情報を含めて記載していただければ、今後診療していくうえでより診療しやすくなると感じています。



現状は、患者さんの多くは、大病院指向があり、診療所より大病院での診療を望まれる方が多いです。





一方で、診療所で全身を診ることで、早く病気を見つけることができたり、病院の専門科から紹介フォローとなり、診療所で全身を診ることで新たな病気を見つけることがあります。「いつでも何でも診る」、必要なら専門科に「適切に紹介する」、その人を「最期まで診る」という意識を医療者が持ち、さらに多職種とコミュニケーションをとりながら協働する意識をもち、日々診療にあたることで、患者さんや家族が診療所と後方病院との連携がしっかりしていると認識でき、診療所に対する不安・心配が無くなれば、「まずはかかりつけ医に診てもらおう」という意識が強くなるのではないでしょうか。

診療所でもできる検査を早期に行い情報を揃え、紹介の必要があれば患者さんの希望の病院に患者さんの全てを伝える紹介状を記載し紹介できれば、紹介先の病院の負担も減り、紹介先の病院ともより良い連携がとれ、良い地域医療づくりに繋がるのではないでしょうか。